



原典で読む 外国人が見た日本

高橋知明

(瀬田玉川神社禰宜・公益財団法人
鎮守の森のプロジェクト事務局次長)

第四回 タウンゼント・ハリス『日本滞在記』(三巻)

タウンゼント・ハリス(一八〇四—一八七八)と言えば、昭和初期にブームとなった『唐人お吉』の物語の中で、悪役で登場します。お吉は鶴松という婚約者がいたにもかかわらず、ハリスが下田一の美人芸者だったお吉を要求したため、鶴松と別れさせられハリスに奉公します。ハリスはお吉を弄び、手切れ金を渡し下田を去ります。その後のお吉は世間から異人に肌を許した「唐人」(外国人の意)として罵られ、行き場を無くし酒におぼれて、最後は入水自殺をするという悲劇です。物語では悪いイメージのハリスですが、実際にはどんな人物だったのでしょうか。

徒でした。彼が体調を崩し看護婦の派遣を下田奉行に依頼した際、下田に留めたい奉行は『唐人お吉』こと本名「斎藤さち」という芸者を派遣します。今でいう「ハニートラップ」というやつでしょうか。正体を察した彼は、わずか三日で大金を与えて解雇したというのが真実のようで、彼の日常生活からも納得のいく話かもしれません。

しかしながら、安政四年(一八五七)五月、彼は幕府と下田協定を締結し、これまでの貨幣交換比率一ドル二分を一ドル三分に変更。これにより日本の小判は海外に大量に流出します。彼自身も丸出で、外交官としては相応しくない一面もあります。

そして同年十二月、下田から江戸出府が叶い、將軍徳川家定に謁見して大統領親書を手渡します。また老中堀田正睦には、世界情勢が一変して日本はいずれ外国の大艦隊に脅かされるようになるから、今のうちに米国と条約を締結すべきだと強く迫ります。これを受け、堀田は朝廷に条約の勅許を得ようとはしますが、失敗。翌年、大老になった井伊直弼が勅許なく日米修好通商条約を締結。神奈川・長崎・箱館を開港、関税自主権がなく、治外法権を認めるなど日本は不利な条件を呑みます。同時に、彼は初代駐日公使と

ハリスは、アメリカ合衆国のペリー来航によって嘉永七年(一八五四)に日米和親条約の締結をした翌年、日米修好通商条約締結交渉のため、初代日本駐節総領事として下田にやってきました。ヘンリー・ヒュースケンを通訳兼秘書に伴い、下田奉行に江戸出府を要求。これに対し幕府は「じらし作戦」でなるべく下田に留めようとはします。彼は「日本の役人は地上における最大の嘘つき」と罵っています。当時、イギリスはエリート階級が外交官になるケースが多いのに対し、アメリカは彼のような商人出身者に外交官



タウンゼント・ハリス

なり江戸に公使館を設置。井伊は反対した尊皇攘夷派や一橋派を弾圧(安政の大獄)。この流血の始まりが井伊大老暗殺に繋がり、旧体制から新体制への流れが一気に加速していきます。

日本人にとってはあまり好きになれないハリス。それ故に『唐人お吉』のような物語に悪役として描かれるようになったかもしれません。それでも記録を丹念に読んで行くと、日本を高く評価していることが分かり、却って興味深く思えます。例えば、江戸出府の途上で見た民衆の姿について、罪悪感を感じながらも最高の賛辞を呈しています。

「彼らは皆よく肥え、身なりもよく、幸福そうである。……私は時として、日本を開国して外国の影響をうけさせることが、果してこの人々の普遍的な幸福を増進する所以であるか、どうか、疑わしくなる。私は、質素と正直の黄金時代を、いずれの他の国におけるよりも、より多

を任せることができました。

この頃の彼はストレス解消が必要だったのか、よく付近の散策をしています。住民については「喜望峰以东のいかなる民族よりも優秀」と評しており、法度に対する恐怖感情が表現を禁じているが、本当は外国人との交流を望んでいるとも見えています。また、町については「家は清潔で、日当りもよくて気持ちがいい。世界の如何なる地方においても、労働者の社会で下田におけるよりもよい生活を送っているところはあるまい」と書いています。しかし、混浴の文化については眉を擡めています。

「又或る時ヒュースケン君が温泉へゆき、真裸の男三人が湯槽に入っているのを見た。彼が見ていると、一人の十四歳ぐらいの若い女が入ってきて、平気で着物を脱ぎ、『まる裸』となって、二十歳ぐらいの若い男の直ぐそばの湯の中に身を横たえた。このような男女の混浴は女性の貞操にとって危険ではないかと、私は副奉行に聞いてみた。彼は、往々そのようなこともあると答えた」

現代と違って大らかな時代ですね。ハリスの生活は、朝起きて冷水を浴び、体を清めるのが日課。極寒でも続けて周囲を驚かせました。禁酒・禁煙、日曜日には安息日の戒律を遵守。そして彼は聖公会(イギリス国教会の一派)の敬虔な信

く日本において見出す。生命と財産の安全、全般の人々の質素と満足とは、現在の日本の顕著な姿であるように思われる」また、謁見した將軍家定と殿中の様子をこう語っています。

「大君の衣服は、絹布でできており、それに少々の金刺繍がほどこしてあった。だが、それは想像されるような王者らしい豪華さの何ものからも遠いものであった。燦然たる寶石も、精巧な黄金の装飾も、柄にダイヤモンドを鑲めた刀もなかった。そして、むしろ、私の服装の方が彼のものよりも遙に高価であったといっても過言ではない」「私は殿中の何れの場所においても、鍍金の装飾を見なかった。木の柱は、すべて白木のままであった。火鉢と、私の用いるために特に用意された椅子と卓子のほかに、どの部屋にも調度の類が見あたらなかった」。

さらに、おもてなし料理については「日本式の料理法によって、たいへん美しかった。膳の中心装飾が麗しく盛られていた。長寿の象徴である小形の椀の木と、亀と鶴が、歓迎と尊敬のしるしをもって一際美しく飾りつけられていた」と書いています。

將軍を含め質素儉約が武家社会の基本であること、しかしその中にも美しさを追求してやまないこと、ハリスはこの国の心と形を、生き生きと記録したのです。